

会員の広場



小さな花園

坂本 正治（東京）

今年は桜の花もアツという間に散り、葉の影も大分濃くなってきた。桜について、最近気になってきているのは、近所の桜の木が随分減っていること。街路樹として使われている桜は地元の商店街や地公体等の努力で、新しい樹も植えられているようだが、個人の家の庭

に咲く桜は減っている。

昔は通りの角々に見事な花が咲き誇っていたものだ。そのような木も、屋敷がマンションに建て替えられる時に切り倒されたり、土地が小割りにされて切り売りされる時に抜かれたりした。また、樹の寿命もある。さらに、落ち葉の始末や毛虫の駆除に手間がかかる。そのため、いつのまにか切り詰められて小さくなったものもある。近隣では桜だけでなく、ケヤキなどの大きな木、大きな緑は確実に減っている。

ところが、小さな緑は元気だ。毎年春になると、我が家から駅への途中の道は、花のオンパレード。ブロック塀に吊り下げられたフラワーポットに色とりどりのパンジーが咲き

乱れている家がある。門から玄関までの短いアプローチにはチューリップが存在を主張している。その隣の家ではさくら草や水仙が風にゆれている。温暖化のせいか、品種改良によるものか、クリスマスローズやシクラメンなど冬の花も随分長く咲くようになった。近くの家では、玄関先に置いてある植木鉢に今年も君子蘭が立派な花をつけた。また、道路と建物との細長い土地にも、菜の花やハナニラがにぎやかに咲いている。ペットとして飼われている犬や猫も小型化しているが、花も小柄なものが好まれてきているようだ。それには品種改良や輸入物も寄与している。

最近では、バラや牡丹、芍薬のような花が咲く、庭らしい庭を持つ家は減ってきたが、代

わりに小さな花園が増えてきた。ほとんどが塀に沿った狭い土地や、門の周辺、あるいは、門から玄関までの僅かな空間を利用している。そんな花壇を見ると、日本人は本当に花が、そして緑の植物が好きなのだと思う。日本人は古来より、自然を畏れ、敬い、愛し、共生を重んじてきた。そのひとつの表現の形が盆栽だ。盆栽はあの狭い空間に見事な小宇宙を作り上げている。

玄関周りの狭い空間や、マンションのベランダに置かれた植木鉢に、夫々の人が丹精を込めて花を植えている。それらの街の小さな花園からも、盆栽と同じように、花を、そして自然を愛する人たちの優しい気持ちが届いてくる。